



# 哲学と社会学の幸福な闘争 : タルドという奇跡についての一考察 (特集 社会学のアイデンティティと多様性)

鈴木, 泉

---

(Citation)

社会学雑誌, 20:95-110

(Issue Date)

2003-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

<https://doi.org/10.24546/81011002>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011002>



# 哲学と社会学の幸福な闘争

——タルドという奇跡についての一考察——<sup>(1)</sup>

鈴木 泉

神戸大学文学部助教授

## はじめに

現在の学問の配置図において、哲学と社会学との関係は必ずしも良好なものではない。米虫正巳が正確に描いているように、デュルケムからブルデューに至るまで哲学と社会学の〈冷戦〉は続いているように思われる。<sup>(2)</sup>しかしながら、私の知る限りでは、そして米虫も示唆するように<sup>(3)</sup>、少なくとも一度は哲学と社会学との幸福な闘争ないしは交渉があった。忘れられた社会学者ガブリエル・タルドがその闘争の場所である。哲学的な概念の構築と社会的な分析とが奇跡的な結合を遂げた希有な例としてのタルド。

ベルクソンによって最大級の賛辞を与えられ、<sup>(4)</sup>ロバート・パークの博士論文の主題となること<sup>(5)</sup>によってシカゴ学派の社会学に大きな影響を与えながらも、忘却の淵に追いやられた不幸な社会学者、という言い方はもはや適切ではない

だろう。タルド再評価の気運は高まっている。消費社会を特徴づける流行を代表とする模倣現象の分析の先駆者、或いは、一九世紀以来の群衆という新しい現象形態の分析の先駆者としてのタルド<sup>(6)</sup>。だが、何よりも、現代フランスの哲学者ジル・ドゥルーズがその発火点である、と言わねばならない。その名著『差異と反復』に差し挟まれたそれほど長くはない註から、ガタリとの共著である『千の高原』における〈タルド讃〉に至るまでの、分量としては多くない分析は、その解明の密度と的確さによって、新しい世紀におけるタルド復興に対して大きな影響を与えつつある。<sup>(7)</sup>

本稿も、その流れ、つまりは模倣の一端を担いその復興の気運を加速させることをも目指しながら、タルド思想における哲学と社会学との幸福な闘争のありさまに採りを入れることにしたい——それが、〈論理を超えた影響(Influence extra-logique)〉にならないことを祈りつつ。

## 一 タルド思想の枠組み

タルド思想の大枠を確認することによって、ここでの作業の位置を明確にしよう。よく知られているように、タルド社会学は、公衆論や犯罪学に関する著作を脇に置くとするなら、「一般社会学の二つの主著」(18539)、即ち『模倣の諸法則』(1890)、『普遍的対立』(1897)、『社会論理学』(1894)からなり、さらに、小著『社会の諸法則』(1898)が、これら三つの主著に「内的繋がり」(ibid.)を与えるという三角錐を形づくる構成になっている。

『社会の諸法則』は、科学が一般に成立する条件を反復・対立・順応、ないしは「類似、コントラスト、調和」(185133)として取り出し、これらの「科学が宇宙の神秘を開くために使用する三つの異なった鍵」(18534)を一般的に解明した上で、社会学もそれが科学の名に値するためには、それ固有の領域、即ち、それ固有の反復の領域・対立の領域・順応の領域をもたねばならないとする。つまり、コスモロジーないしは存在論として、現象一般に関する反復・対立・順応という三つの基本的カテゴリーが前提された上で、社会に固有の反復・対立・順応を解明することが社会学固有の作業に他ならない、という議論構成になっている。社会に固有の反復は、模倣の現象として、対立は闘

争の現象として、そして順応は発明の現象として取り出され、各々の法則が解明される。実際にはそれぞれの著作に排他的に主題が割り振られているわけではなく、全体としては、かなり入り組んだ構成になっているが、模倣の現象が『模倣の諸法則』において、闘争の現象が『普遍的対立』において、順応の現象が『社会論理学』においてそれぞれ主題的に解明される、とすることは出来るだろう。

しかしながら、体系の秩序においてはこのように整理することが出来るにしても、社会を発生させ、成立させている言わば発生のメカニズムに関しては、以上の整理では不十分である。タルド社会学は一般に心理学的な社会学であると評されることが多いが、社会現象を貫徹する法則を解明するに留まらず、(コスモロジーないしは存在論を背景にしながら)心理現象に関する独特な解明がそれに先立ち、その解明が社会現象の解明を基礎づけている。ジャン・ミレーの的確な要約によれば、その事情は次のようになる。

心理的ファクターは原因の形式と条件の形式とから成立するが、原因、即ち個人的ないしは社会的な反応を引き起こすファクターは三つあり、第一に信念(croyance)と欲求(desir)、第二に発明、第三に間心理的な関係である。これに対し、条件、即ちそれらの原因によって引き起こされた結果を社会生活を介して伝達する心理的ファクターもまた三つあり、それが、模倣・対立・順応である。心理現

象が実際に発動し、何らかの結果をもたらすことを可能にするのが、原因のファクターであるとして、それらの原因は、それらが効果を及ぼすのに相応しい条件がなければ不毛なままに留まる。実際に生じた心理現象が人間社会を通して伝達され、反響することを可能にする条件、ないしはその形式が、一般社会学の三つの主著において説明される三つの現象とそれらの法則に他ならない。

ということとは、模倣・対立・順応、ないしは模倣・闘争・発明という三つの現象ないしは法則の解明、即ち、タルド社会学の大枠を形成する議論は、社会の諸法則の解明の試みではあっても、社会一般の成立のメカニズムの基礎には届いていないことになる。実は主著のあちこちにおいて主題化されているこの点の解明を欠くときに、タルド社会学はその基礎づけを失うし、また、私たちの信じているところでは、タルド社会学の独創的な部分の幾つかを見過ごすことになる。ここでの考察は、体系としてのタルド社会学の前提となる、社会なる現象領域の発生のメカニズムを辿り、その意義を解明することに向けられる。

## 二 微分的ミクロ社会学の基礎

タルドの公刊された最初の哲学論文である「信念と欲求」は、まさしく、心理現象の原因としての基本的ファクター

たる信念と欲求の分析を行っている。一八八〇年に『哲学誌』に刊行された論文を、一八九五年——ということとは、『社会論理学』刊行直後ということになるが——に論文集『社会学雑録』におさめるにあたってタルドは、「この試論が答える、心理学的というよりはなお一層社会的である諸問題は、主要な重要性を全く失わなかった。[……]それらの問題がここで受け取る解答はいえ、その本質的な箇所において、真であるように思われることをやめることがなかったし、私がその後の仕事において、社会生活の多様な側面に対して行ったその解答の適用は、その正しさを確認することの出来たもののように私には思われた」と述べる。つまり、この論文における信念と欲求に関する分析は、単に心理学的な分析であるわけではなく、タルド社会学の出発点と言えるものである。

この論文の主題は、心理現象のうちから計測可能な量を引き出すことであるが、その議論のポイントは次の三点にある。

まず、タルドは心的現象一般の分析を行い、それが信念と欲求、及び、それらの適用点たる純粹な感覚からなり、前二者が「主体を構成する本有的な力」、「主体が感覚という生の材料を受け取る鑄型である」(CD240)ことを解明する。

第二に、「私たちに認識される量的な実在は、プラスの

価値とマイナスの価値という内的な対立を本質的に受け入れるものである」(CD253)という議論を大前提にして、量化出来る心的現象として信念と欲求のみを指定する。(したがって、感覚それ自体は量化出来ない質的差異を含みこんでいる。)

第三に、信念と欲求とを測定する共通の尺度が実在し、それも、それらの尺度は個人的な現象にのみ適用可能なものではなく、**集団的な尺度も実在する。**

こうして、個人的と集団的との違いを問わず、心的現象に関する科学的な考察の可能性が開かれた。しかしながら、先に引用したように、この論文の問題は「心理学的というよりはなお一層社会的である」と言われていた。だからこそ『社会論理学』の冒頭において、「社会的現象は全て信念と欲求とに帰する」(1576)と言われるのである。

しかしながら、個人の心理現象としての信念と欲求と、集団的な心理現象としての信念と欲求との間には大きな違いがあるように思われるし、集団的な心理現象を社会的現象とするにはそもそも社会という現象を規定するという作業が前提とされるべきだろう。

さて、この点に関してこそタルドの考察の最も特徴的な点の一つがある。先回りして述べておけば、タルドはそもそも、個人と社会という対をもともと設定していないのである。

## (一) 信念と欲求の存在論

『社会学雑録』に「信念と欲求」に続いておさめられている「モナドロジーと社会学」は信念と欲求との存在論的な説明を行っている。まず、論文「信念と欲求」を指示しながら「宇宙の精神化」(MS45)について論じる次の一節に注目しよう。

信念と欲求という魂の二つの状態、というよりも二つの力(force)は、そこに肯定と意志とが由来するものだが、これらはこの「宇宙の精神化という」際だって目立った特質を示している。人間や動物の心理学的な現象全てにおいてそれらが現存しているという普遍性、信じたり欲したりするわずかな傾向性から確実性や感情に至るまでのそれらの広大な階梯の端から端までそれらの力の性質が同質であること、そして最後に、それらの力が互いに浸透しあっていて、それに劣らず著しい類似性をもった他の特質をもっているということ、これらによって、信念と欲求とは、物質的な諸要素に対して時間と空間とが演じているのとまさしく同じ外的な役割を、自我において、諸感覚に対して果たしている。(ibid.)

二点が重要である。まず第一に、ここでも信念と欲求とが二つの力と呼ばれ、また、それらの力が「自我において(dans le moi)」空間と時間に等しい役割を演じている、と言われていることに注目しよう。論文「信念と欲求」に

おいてもまた、信念と欲求とは「主体を構成する二つの力」  
ないしは「二つの力能 (puissance)」(CD242) と呼ばれ  
ていた。基本的な心理現象たる信念と欲求は、自我の心理  
的な現れ、主体ないしは基体としての自我の現れではなく、  
自我を構成する力の次元として捉えられているのである。  
(実、時間と空間もこの二つの力能から導出されてくる  
のだが、この件は措く。)

次いで第二に、この二つの心理学的な力の現存の普遍性  
によって、宇宙の精神化が可能になるとされている。これ  
らの力は、人間だけではなく、「動物の心理学的な現象」  
においても示されている。これは一見すると悪しき人間中  
心主義であるように思われるし、人間に見られる心理現象  
を動物やさらには宇宙一般に投影したものでしかないよう  
にも思われる。しかし、タルドは、この仮説には「擬人的  
なところは全くない」(MS46) と述べ、次のように言う。

信念と欲求とは意識されない諸状態を含むという唯一の特権を  
有している。(ibid.)

意識されず、感じられない感覚は不可能であるが、これ  
に対し、意識されない欲求や判断があることは事実であっ  
て、快や苦に含まれる欲求や、感覚に含まれる位置の判断

がそれである。そして、これだけならば、なお人間の心理  
現象に定位しながら議論が進められているようにも思われ  
るが、タルドはそれら意識されざる力としての信念と欲求  
を、単細胞生物にも認める (cf. CR241-242)。信念と欲求  
は様々な仕方で言い換えられるものの、信念とは生体が、  
他を区別し、他から自らを区別するという識別する力で  
あり、欲求とは生体が自らないしは他を変容させる肯定  
や否定の力である、と差し当たりは言うことが出来る。こ  
れらの力を生体一般に認めることによって、「擬心主義  
(psychomorphisme)」(MS43) を唱えるのである。

してみると、タルドの立場はかなり独特なものである。  
主体としての個人を前提とした上でその心理現象を基礎に  
社会現象を説明するのでもなければ、人間の心理現象に特  
権を置いた上で、人間に固有の心理現象をもとに社会現象  
を説明するのでもなく、生体一般の心的な力の傾向に定位  
しつつ説明が進められるわけであるから、それは個人心理  
学にも(人間)集団心理学にも還元されない、生態学的な  
ミクロ心理学に基礎を置くものと言わねばならない。

だが、以上はタルド思想の出発点に過ぎない。信念と欲  
求とは心理的ファクターの原因として、社会学の基礎に据  
えられるべきものではあるが、言わば個人の手前に位置す  
るミクロな心的力が、社会現象をどのように成立させると  
考えられているのか、ということが次に問われねばならない。

## (二) 社会の成立

デュルケムとの論争の焦点の一つともなるこの論点に關しても、その立場が明確に描かれている箇所はその事情を探ろう。

出発点はまさしく社会的なるものによって、タルドが何を考えているか、ということである。公式的な見解は『模倣の諸法則』第三章に収められた「社会とは何か」において与えられている。結論は次の通りである。<sup>13)</sup>

「社会とは」互いの間で模倣しつつある限りでの、ないしは、現実的に模倣し合っていないにしても互いに類似している限りでの、そして、共通の特徴が同じモデルの昔からのコピーである限りでの存在の集まり「である」。(LII28)

社会とは何か。私たちは答えた。模倣である。(LII34 et cf. LII47)

(人間) 社会の定義を幾つか検討した上で、タルドは模倣によって社会的繋がりを定義し、社会の発生を説明している。そして、その模倣はと言えば、これもよく知られているように、タルドは次のように述べる。

模倣とは一種の夢遊病である。(LII47)

会話や読書に由来する観念やイマジユの喚起であれ、

他者の行為を源泉とする習慣的な行為であれ、これらはいずれも社会的な事実であり、模倣の一種である。この模倣を可能にする暗示が、夢遊病に喩えられ、催眠術や夢という一九世紀後半において大きな話題となった現象と同一視される。社会状態とは催眠状態であり、社会関係とは催眠状態のように意識下において成立するものだと言われている、と一旦は理解することが出来る。

しかしながら、模倣はまず、科学としての社会学の成立に關する検討というより、広い文脈から取り出されてきた概念であることに注意しなければならない。量を対象とする科学が扱う類似の現象を可能にする反復を、その現象領域に於いて三つ、即ち、物理学が対象とする物理的反復としての波動、生物学が対象とする生命的反復としての生殖と遺伝、そして社会学が対象とする社会的反復としての模倣として取り出し、社会的な起源を有する類似の発生を模倣によって説明しようとするのである。(cf. LII47-76 et LSS ch.1)

それでは、社会的反復としての模倣は何を反復し、何を模倣するのか。この点に關して重要なテキストをやや長くながるが引用しよう。

発明と模倣が基礎的な社会行為である、ということを私たちは知っている。しかし、その行為が成立するところの社会的実体

ないしは力はどのようなものか。この行為は社会的実体ないしは力の形式に過ぎないのだが。言い換えると、何が発明されたり模倣されたりするのか。発明されたり模倣されたりするもの、つまり模倣されるものは、常に觀念あるいは意欲、判断ないしは意図であり、そこにおいて一定程度の信念と欲求が表現されるのであり、実際、この信念と欲求とは、言語の言葉、宗教の祈り、国家の行政、法典の条文、道徳の義務、産業の労働、芸術の手法、こういったものの真髄全てである。したがって、信念と欲求、それが実体にして力であり、また、信念と欲求とが結びつく、感覺的な量の全ての根底に分析が見出す二つの心理学的な量なのである。そして、まず発明が、次いで模倣が信念と欲求とを組織化し、用いるためにそれらを捉えるとき、そこには同様に真の社会的量がある、ということになる (L1204-205)。

したがって、反復としての模倣が反復し模倣するのは、力としての信念と欲求であり、これらの力の反復によって社会が成立するとされている。それでは、反復としての模倣は誰が行い、誰が模倣しているのか。社会的人間が「真の夢遊病者」(L1108)と言われていることを文字通りに理解しよう。ここにはいかなる神秘主義も奇矯さもない。意識されると意識されざるとを問わず、力としての信念と欲求は反復され、そこにおいて社会は成立し、同時に社会的人間も成立する。模倣は主体が自覚的に統御出来るようなものではなく、まさに夢遊病者や催眠術にかけられた者が

そうであるように、模倣という反復を常に既に行ってしまっているのである。だから、反復としての模倣に先立って模倣を行う主体が存在するわけではないから、誰が模倣しているのかという問いは不適切なものと言わざるを得ないし、敢えて言うのであれば、力の反復こそが主体であり、心理的な主体は事後的に見出されるに過ぎないのである。

以上の考察が、社会学の科学としての有効性に関してどのような意味を有するのか、という点に関しては様々な評価がある。だが、ここで詳しく検討することは出来ないが、少なくとも強調しておかねばならないのは、タルドが一八九四年以来、司法省犯罪統計局長を務めていることから当然なことではあるが、このような考察が一貫して方法的な視点に先立たれている、というそのことである、即ち、統計学の重要性をタルドは主張し、統計学によって模倣という唯一の社会関係に対して計量可能性を確保するのである。<sup>(16)</sup>

ともあれ、信念と欲求という力の反復から社会の成立を解き明かそうとしていることに注目しなければならぬ。統計学に裏打ちされつつ、力の反復としての模倣によって集団的な類似現象としての社会の成立を説明しているのである。したがって、タルドの考察は、主体と構造、内と外、主体性と外在的拘束性等々という二項対立——お望みならば、個人的心理と集団表象といったそのリストを次々と

挙げていくことが可能だろう——の手にあつて、社会という現象の成立を可能にしている力の場に定位して進められているのであり、その限りで、社会とは力の場から析出されてくるものに他ならないから、タルド社会学は、生態学的なミクロ心理学に基礎を置いた、まさしくミクロ社会学と呼ばれねばならない。

### (三) 差異のコスモロジー

しかしながら、以上の考察のみでは、タルド思想のさらに重要な側面が見過ごされてしまう。力の場に定位しつつ分析が進められる、ということだけは不十分であり、そもそもその力に関する説明においてこそタルド思想の獨創性とその特質が見て取られる、と思われるからである。

というのも、一般に力という概念は曖昧なものであり、取り扱いが難しい。力はそれが現実化している限りにおいて処理可能になるが、現実化されていない潜在的な力そのものを規定するのは難しいからである。人間的な現象を扱う場合には、力は、能力や習慣、さらには慣習、或いは威力といったものとして議論されることもあるだろう。それでは、タルドは力なる概念にどのような規定を与えて議論を進めているのか。

信念と欲求は計量可能な二つの力として取り出された。しかし、それはどのような意味で計量可能なものとされて

いるのか。まず、それは「温度」(CD289) がそうであるような強度 $\parallel$ 内包量である。そして、内包量として捉えられる限り、あれこれの力は同一の尺度のもとにおける度合いを有する。この度合いは、一つの差異でなければならぬ。タルドは次のように言う。

私が欲求と呼ぶところの、心的傾向、精神的渴望というエネルギーは、私が信念と呼ぶところの、知的なつかみ、同意、精神的収斂というエネルギーと同様、連続的で同質の流れであり、各々の精神に固有の情感性の色合いによって多様に色づけられて、ある時は分割され散らばった仕方であり、ある時は集中した仕方であり、同一のものとして循環し、或る人から他の人へと同様、それらの人の各々においても或る知覚から他の知覚へと、変質することなしに伝達されるのである。(LSS66-67)

この一節は、信念と欲求という力が、ある種のエネルギーによって可能になること、そしてそのエネルギーそのものの同一性を告げている。だが、注意しなければならない。そのエネルギーが循環し、伝達される時には、必ず一定の内包量 $\parallel$ 強度という差異において現れなければならない。タルドの議論の背景には、二つの仮説がある。一つは、個々の信念と欲求の現れの基礎として、より根底的なエネルギーを据えるという宇宙論的な存在論であり、もう一つは、その現れを常に差異として捉えるという差異の論理で

ある。前者については、それが社会現象・生命現象・物理現象という階層秩序において捉えられるそれぞれの反復を基礎づけるものとして考えられている、ということを指摘しておけば、ここでは十分である (cf. II 205)。

力が常に差異において、差異として現れる、という論点がここでは重要である。力の内包量＝強度の議論を支えているのは、まさしくこの差異の論理に他ならないからである。論文「信念と欲求」が、心的現象の測定可能性を主題とし、測定可能な唯一の心的現象として信念と欲求を導入するに至ったことは既に見た通りであるが、この概念はもう一つ別のコンテクストを有している。これも既に触れた通りだが、「宇宙の精神化」という宇宙論的なコンテクストである。この点を雄弁に述べる論文「モナドロジと社会学」は、宇宙の精神化を可能にするものとして、信念と欲求という二つの力を導入する。さて、この宇宙の精神化という主題ないしは「擬心主義」はどのように導入されたのか。議論を遡ってみよう。

まず、差し当たりは、(ベルクソンもまた好んで引用する)<sup>16)</sup>トムソンやパストゥール等々を代表とする物理学・化学・生物学といった当時の科学の現状が、「宇宙を粉末にし、諸存在を無制限に多様化している」(MS33)という事実への好意的な評価がある。しかし、そのような事実の追認を超えて、タルドは次のように言う。

無限小へのこの傾斜の途中で留まるいかなる手段もないのであり、確かに全く思いがけないことではあるが、無限小こそ全宇宙の鍵になるのである (MS37)。  
全つは無限小から発し、それに還る (MS39)。

無限小という差異ないしは多様性こそが存在のエレメントである、という仮説がタルドにはあり、これが「宇宙の精神化」という主題に結びつき、宇宙の無限小という差異ないしは多様性として、信念と欲求という力が導入されるのである。だから、このようにして導入された力から成立する心理学と社会学は、より正確には、まさしく微分的なマイクロ心理学、マイクロ社会学と言うべきであろう。

そして、タルドはこの仮説をライブニッツのモナドロジから受け継いでいる<sup>17)</sup>。信念と欲求という概念は、科学としての社会学とモナドロジという哲学との出会う一つの場所であった。

### 三 ネオ・モナドロジ

#### ——「我仮説を作れり」——

タルド社会学は、科学としての社会学を確立するという要請と哲学的な思索との幸運な闘争から生まれているように思われる。その闘争の具体的な現場を、信念と欲求とい

う概念において見てきた。そして、その哲学的思索の源泉はライプニッツのモナドロジーであった。しかし、タルドの「ネオ・モナドロジー」<sup>(18)</sup>は、ライプニッツの思索を受け継ぎながらも、そこにタルド自らのオリジナルな改変を加えた独創的なものである。そのあらましを簡単に辿っておこう。

差異の重視、無限小解析の視点、汎生氣主義、これらに關してタルドが——汎生氣主義は「宇宙の精神化」として——ライプニッツから直接に影響を受けていることは疑いがない。また、信念と欲求という二つの力の概念に關しても、ライプニッツの「表象 (perception)」と「欲求 (appétition)」<sup>(19)</sup>という基本概念の翻案に他ならない (Cf. ex. gr. MSS0-51)。しかしながら、本稿の主題との關係で言うと、少なくとも次の二点にタルドの立場がネオ・モナドロジーたる所以がある。

### (一) 予定調和説の不在とモナドの相互浸透

タルドにおいては、予定調和を可能にする超越的階級は存在せず、諸モナドは観念的な關係を有するのではなく、だからと言って、メーヌ・ド・ピランにおいてそうであるように、努力の事実において直接的で実効的な影響を認めるのでもなく、「諸モナドの互いに結集する傾向」(MS66)を強調し、「互いに外的である代わりに、相互に浸透し合

う開かれたモナド」(MS56)を肯定する。モナドの様々な力は、言わば小さな自我として相互に影響を与え合い、社會を構成する。模倣とはこのモナド間の相互浸透の關係の言い換えに他ならない。比喩的に言えば、モナド間には、ライプニッツ流の鏡の映し合いの關係ではなく、写真による「刻印」(1146)のような遠隔的な影響關係がある。モナドは宇宙全体を映す鏡ではなく、写真のように写し合うことによって、その映し合いこそが社會を構成するのである。

### (二) モナドにおける新たな差異の産出

さらに、ライプニッツのモナドは窓のない閉じたものであり、「外的原因はモナドの内部に作用することが出来ないから、モナドの自然的变化は内的原理から来ている」<sup>(20)</sup>以上、欲求は「一つの表象から他の表象への変化ないしは推移を起こす内的原理」<sup>(21)</sup>に過ぎず、ということは、モナドは多様性を自らの内において表現し、その限りで差異を内的に産出すると言うことは出来るけれども、その差異は飽くまでも観念的なものに留まるだろう。これに対し、タルドにおいては、モナドは互いに実質的に相互影響に入るのみならず、言わば垂直に開かれたエネルギーの場から析出してくるものだから、そのようにして顕現するモナド同士が実質的に相互影響を与え合うことによって、新たな差異が

宇宙において二重の意味で産出されるのである。<sup>(24)</sup>

一見するとお伽噺のようにも思われるモナドロジョーに対し、差異に対する独自の直観をもとに改変を加えた上で、タルドはネオ・モナドロジョーの仮説を提起する。しかし、その仮説は、社会学に対しては、ミクロ社会学という大きな果実を生み出す。そして、その果実は、翻ってネオ・モナドロジョー仮説の意味を十分に明かしてくれる。これは、社会学と哲学との幸福な円環的な交渉の姿である。「社会的探求と形而上学的解釈の区別」を強調するタルドにとって、この円環的な交渉は、どちらかが覇権を握るようなものではなかった。ここではその円環のごく基本的な場面を見たに過ぎないが、その壮大な円環的な交渉の中に入り込むことは、社会学にとっても哲学にとっても捻りある作業となるだろう。

## 終わりに

我らが同時代人タルド。その意味は二つある。一つは、現代社会の分析を行うタルド像である。タルドは新しいメディアの出現に敏感であったし、——実際には不可能であるが——完璧な社会を「良き観念の伝達が「……」瞬時に行われる」(L130) ようなものとして描いていた。インターネット時代——それは同時にアノミーの時代でもあ

る——のタルドの姿を思い描いてみることは極めて興味深い。しかし、私たちにまづもって貴重に思われたのは、哲学的概念を創出する大胆な構想力と科学としての社会学の実証性との幸福な結合の姿としてのタルドである。タルドは、「哲学全てが、一七世紀においては物理学を含み、一八世紀においては一般生物学を含んでいたように、一九世紀においては、その全き必然性から一つの哲学が本質的で内在的な部分として一つの社会学を含むのであり、そういうわけでタルドは社会学者になった」とエスピナスが言うように、この時代に固有の幸運な産物であると言うべきかも知れない。確かに、デカルトのように数学者・自然科学者にして哲学者であることが現代では不可能であるのと同じように、同時に一人の人間が社会学者にして哲学者であることはもはや不可能であろう。それは遅れて出現した学問・科学に取り組む特権的な先駆者にもみ許された僥倖である。しかしながら大切なのは、一人の個人において二つの異なる思索が結合されることではない。ことは哲学という活動と社会学という科学の関係の問題である。

かつては様々な学問を包括し、万学の女王の位置にいた哲学が、様々な学問・科学を自らの手で育て自立させるに従い、巣立つ子供に土地を一つ一つ財産分与することによって、いつの間にか自らに固有の土地という学問領域を語

り家系図を探ること（『哲学史』や学問の予備的部門（『オルガノン』としての論理学）、さらにはニッチ（『……』）でしかない、ということが現実であるかに語られる。しかし、端的に言って、哲学にはもともとそれ固有の学問領域などなかったものであり、あるのは——ここでは敢えて具体的に述べることはしないが——家族的類似性を有する活動としての哲学だけであった。自然学も社会学も、そのような哲学の活動を行うものの中からある種偶然に生まれてに過ぎないのである。とは言え、固有の対象を有する諸科学と哲学とが無関係である、というわけでもない。両者はどちらかが覇権を握るような関係にあるのではなく、両者には干渉があり、闘争と言っている。タルドという——個人というよりは——場合は、哲学と社会学との闘争ないしは干渉の最も幸運な姿であったように思う。本稿は、その姿を具体的に検討することによって、今後の私たちの闘争ないしは干渉のありようの一つの——タルドによって発明された——モデルを描く試みであった。このモデルをもとに私たちがどのような闘争ないしは交渉を實踐し、新たな発明を作り出していくか、というのはまた別の話である。

## 凡例

タルドの著作の引用・指示は、註（8）に挙げた『タルド著

作集』に収められているものについては、そこから行う。この著作集は、あくまでも普及版として専門家向けのものではないと唱われているので、テキスト解釈において問題を孕むことも事実であるが、本稿においては問題ない判断したからである。引用・指示は、略号を用いて頁数と共に文中に指示する。なお、引用文の強調は全て原著者のものである。

## 註

（1）本稿は、哲学と社会学との関係についての考察を求められた白鳥義彦氏の依頼に応じて執筆されたものである。タルドについて纏めて考える機会を与えて下さると共に、池田氏の論文を初めとする資料の入手に関しても便宜を図って下さったことに深く感謝したい。また、タルドに関する論文執筆の直接の機縁を与えて下さった同僚の宮田真治氏にも感謝したい。

（2）米虫正巳「冷戦の系譜——社会学の哲学批判」『人文論究』関西学院大学人文学会、第四十九卷第三号、一九九九年、を参照。この極めて優れた論文は、同著者による「社会的なもの閉域」『人文論究』関西学院大学人文学会、第五十卷第二・三号、二〇〇〇年）と共に、問題の所在を極めて明晰に抽出している。なお、哲学から社会学へと向けられた批判の一例として、廣松渉による四肢の構造論からするデュルケム論を挙げておきたい。「デュルケム倫理学説の批判的継承」『世界の共同主観的存在構造』勁章書房、一九七二年（『廣松渉著作集』第一卷、岩波書店、一九九六年）。

（3）米虫、前掲論文、五六から五七頁、を参照。

(4) Henri Bergson, *Mélanges*, Paris, PUF, 1972, pp.799-801 et 811-813.

(5) Cf. Robert Park, *The Crowd and the Public*, Chicago, University of Chicago Press, 1972.

(6) 次の書物が代表的なものである。

横山滋『模倣の社会学』丸善ライブラリー、一九九一年。  
今村仁司『群衆——モンスター誕生』ちくま新書、一九九六年。

Serge Moscovici, *L'âge des foules*, Paris, Fayard, 1981.

(7) 私の知る限りでドゥルーズがタルドに触れている箇所は、全部で八箇所ある。参照されているテキストは、『社会学四部作と小編「モナドロジーと社会学」及び「普遍的变化」である』(cf. Gilles Deleuze, «La conception de la différence chez Bergson», in *Les Etudes bergsonniennes*, vol. IV, 1956, repris in *L'île déserte et autres textes*, Paris, Minuit, 2002, p.57, *Différence et répétition*, Paris, PUF, 1968, pp. 38-39, 104-105 et 264; (avec Félix Guattari) *Mille plateaux*, Paris, Minuit, 1980, pp. 267-268; *Foucault*, Paris, Minuit, 1986, p. 81; *Le pli*, Paris, Minuit, 1988, p.116 et 147) と、タルドは『タラ哲学の総体』、『全モスコロジイ』、『タラ社会学を基礎とする差異と回復の弁証法』(*Différence et répétition*, op. cit., p.105) と要約しているが、そのタルド論の主題は、(i) 差異と回復の(クーゲル的ではない)弁証法 (cf. *L'île déserte et autres textes*, loc. cit.; *Différence et*

*répétition*, op. cit., pp.38-39 et 104) (ii) タラ社会学 (cf. *Différence et répétition*, op. cit., pp. 104-105; *Mille plateaux*, op. cit., pp.267-268; *Foucault*, op. cit., p.81) (iii) 対立論 (cf. *Différence et répétition*, op. cit., p.264) (iv) ライブニッツン解釈 (cf. *Le pli*, op. cit., p.116 et 147) にわたる。(i) はタルド思想全体を俯瞰しつつ『差異と回復』の問題構成全体と関わる極めて重要な(しかし難解な)議論であり、(ii) は、分子的/モル状のという『千の高原』のキーワードの一つにおいて捉え返された上で、フーコーの権力論とブルデュー社会学と接合される。本稿の議論を以上と関係づけるなら、(ii) を介して (i) のとは口まで至ろうとするものである。

また、ドゥルーズその人の解釈とは別に、タルドを読み進めることによって、差異に対する直観、回復の論理からなる壮大なコスモロジーシステム構築、可能性ないしは潜在的な概念の重視、等々、タルド哲学とドゥルーズ哲学との構造的な近さを改めて痛感させられた。ネオ・モナドロジーの系譜と言えようこの思索のライン——その間にメルクソンとリュイエがある——を一つ一つ読み直すことは、極めて興味深い主題となるだろう。この点に関しては、次の書物が小著ながら興味深い。Cf. Pierre Montebello, *L'autre métaphysique. Essai sur Rawlison, Tarde, Nietzsche et Bergson*, Paris, Desclée de Brouwer, 2003.

なお、『差異と回復』及び『千の高原』におけるタルド解釈に関しては、次の書物に簡単な紹介がある。

児玉幹夫『社会的なもの』の探求——フランス社会学

(8)

の思想と方法』白桃書房、一九九六年、一九四から二〇三頁。その影響は、次の二点においてよく見て取ることが出来る。第一に、ドゥルーズの弟子であるエリック・アリエールによるタルド著作集の刊行。ルネ・シェーレルからジャン・マルタンに至るまでのドゥルーズ人脈を序文や後書きに配置したこの著作集の刊行は、タルド復興を印象づけると共に、その復興に対するドゥルーズの決定的な影響の大きさを示している。参考のために、著作集のラインナップを挙げておこう。

*Œuvres de Gabriel Tarde*, sous la direction d'Eric Alliez, Institut Synthélabo, Le plessis-Robinson ou Les empêcheurs de penser en rond, Paris, 1999. Première série: Vol. I: *Monadologie et sociologie*, présentation d'Eric Alliez, postface de Maurizio Lazzarato, 1999 (1895) (=MS); Vol. II: *La Logique sociale*, présentation de René Schérer, 1999 (1893) (=LS); Vol. III: *L'Opposition universelle*, présentation de Jean-Clet Martin, 1999 (1897) (=OU); Vol. IV: *Les Lois sociales*, présentation de Isaac Joseph, biobibliographie de Gabriel Tarde par Eric Alliez, 1999 (1898) (=LSS); Vol. V: *Désir et croyance. Essai et mélanges*, présentation de Bruno Karsenti, à paraître; Hors série: *Maine de Biran et l'évolutionnisme en psychologie*, avertissement d'Eric Alliez, présentation d'Anne Devarieux, 2000 (1882) (=MBE); Seconde série: Vol. I: *Les lois de l'imitation*, présentation de Jean-

Philippe Antoine, 2001 (1890) (=LI); Vol. II: *Les Transformations du pouvoir*, présentation de François Zourabichvili, à paraître; Vol. III: *Psychologie économique*, présentation d'Annie Cot, postface de Bruno Latour, à paraître; Vol. IV: *Philosophie de l'histoire et sociologie sociale. La philosophie de Courtot*, édition et présentation de Thierry Martin, 2002 (inédit); Vol. V: *La criminalité comparée*, présentation de Marc Renneville, à paraître.

第二に、著作集刊行と機を一にした研究書なごしは研究論文の刊行である。

Cf. *Multitudes*, numéro 7, décembre 2001; Maurizio Lazzarato, *Puissances de l'invention*, Paris, Les empêcheurs de penser en rond, 2002.

(9) Jean Milet, *Gabriel Tarde et la philosophie de l'histoire*, Paris, Vrin, 1970, pp.193-194.

(10) «La croyance et le désir», in *Essais et mélanges sociologiques*, Paris, Maloine, 1895, p.235. (以下、この論文からの引用・指示に際しては「CD」の略号を用いる。)

(11) この主題は、最近ちびやん陽の田を見やうじだ、た、メー、キ、キ、キ、キの論の重題は主題の「」で、あ、あ、あ。 Cf. MBE 71-88.

(12) Cf. «La variation universelle», in *Essais et mélanges sociologiques*, op. cit. p.391. (以下、この論文からの引用・指示に際しては「VU」の略号を用いる。)

(13) この点に関しては、タルドその人の社会学の内表にまで踏

み込んだ研究は、少なくとも本邦においては未だ出現していないようであるが、まずは次の諸論考を参考のこと。

大野道邦『「構造化されたもの」と「構造化するもの」——デュルケムとタルドの論争』『社会学の焦点を求めて』、井井・丸山他編、アカデミア出版会、一九八六年、所収；池田祥英「タルド—デュルケム論争における社会学方法論」『日仏社会学年報』第八号、一九九八年・米虫正巳「タルド—デュルケム論争をめぐって」『人文論究』関西学院大学人文学芸部第四十八巻第三号、一九九八年。Cf. Jean Millet, op. cit., pp. 247-257.

(14) 但し、他の現象領域と区別される（社会的な）類似に基づいて社会を考察する視点とは別に、汎社会学主義とでも言うべき視点がもう一方にある。曰く、「全ての事物は一つの社会であり、全ての現象は社会的事実である」（MS58）と。そしてこの論文の後半は、当時の生物学に基礎を置いた社会有機体説を批判し、社会を有機体になぞらえて理解する見解は逆転されるべきであり、その反対に有機体の構造こそが、かえって社会として理解されねばならないとして、多くの反論に答えた上で、この汎社会学主義——「普遍的な社会学的視点」(MS86)——の積極的な教えを取り出すとこう独創的にしてかなり大胆な考察を行っている。ここには、存在 (être) の思想に代わる所有 (avoir) の思想の提示という論点を初めとして、様々な思索の宝庫があるように思われるが、狭義の意味での社会の定義との関係を含めて、検討課題としたい。差し当たりは、Lazzarato にならって、「タルドは「社会的なもの」の概念を一つの意味において理解して

いる。一つ目の意味は、存在論的な社会的なものである。二つ目の意味は、この一つ目のものを基礎に構築された固有の意味における社会的なものを含んでいる」（Maurice Lazzarato, « Gabriel Tarde : un vitalisme politique », in *Monadologie et sociologie*, op. cit., p. 133）と理解しておきたい。ここで考察するのは、後者の狭義の意味における社会の定義である。

(15) この点は、一八八〇年の論文「信念と欲求」以来一貫している。そもそも、この論文の主題は、「心理現象のうちから計測可能な量を引き出すことであるが、それは単に心理現象に対する個人的尺度のみならず、集団の尺度の实在の有無を考察するものであり、そこにおいて統計の重要性が強調されているのである。Cf. CR241-242; *Lich.* 4; 57-58.

なお、この点に関しては、タルドにおける統計学的方法論の重要性を解明する次の論文を参照のこと。

Cf. Jean-Philippe Antoine, « Statistique et métaphore. Note sur la méthode sociologique de Tarde », in *Les lois de l'imitation*, op. cit. surtout, pp. 271-280.

(16) Cf. Henri Bergson, *Les données immédiates de la conscience*, in *Œuvres*, Paris, PUF, 1959, p. 135; *Matière et mémoire*, in *Œuvres*, op. cit., p. 336.

(17) 但し、差異こそが宇宙の源泉であるという考え方は、タルドに固有の言わば基本的な直観であり、タルドの最も初期の哲学的著作は「普遍的差異」（1870）と題されており、また同じく初期の論文の内容を含むという「普遍的变化」は、「差異をそれ自身に対する目的として与える」（VU391）と

う仮説を主題化してゐる。 Cf. Jean Milet, op. cit., p. 76.

(18) Cf. *Ibid.*, p. 147.

(19) ジャン・ミレーによれば、タルドの哲学的思索のポイント  
は、その孤獨な思索から生まれた三つの直観に依じて三つの  
「形而上学的原理」(*Ibid.*; p. 149) 即ち、存在の個体発生  
的な差異化＝分化の原理、可能的なものの先在の原理、実在  
の無限小的な性格の原理、に要約される。いずれも、ライプ  
ニッツとの関わりが指摘されているが、その全体としての関  
連をライプニッツ研究の現状を踏まえて分析することはこ  
こでは出来ない。とりわけ、可能性概念ないしは潜在性概念  
——タルドは潜在性 (*virtualité*) という用語をも多用する  
——の扱いには、ミレーとは異なる繊細さが必要とされよ  
う。なお、以下の論述にあたって、次の論文を参考にした。  
Cf. Eric Alliez, «Tarde et le problème de la  
constitution», in *Monadologie et sociologie*, op. cit.  
(20) G. W. Leibniz, *Monadologie*, § 14-15.  
(21) なお、この点に関しては、スチュンザに對するタルド自身の  
批判的評価 (cf. ex. gr. *MS* 48) にかかわらず、『エチカ』  
第三部における模倣論との比較的検討は興味深い主題となる  
だろう。

(22) *Monadologie*, § 11.

(23) *Ibid.*, § 15.

(24) この方向において、タルドにおける可能性概念ないしは潜  
在性概念を読み抜くことは重要な課題となろう。 Cf.

Maurice Lazzarato, art. cit., pp. 116-118.

(25) Jean Milet, op. cit., p. 146.

(26) Cite in Jean Milet, op. cit., p. 239.